

行動分析学と「質的分析」(現状の課題)*

武 藤 崇

はじめに

近年、マイノリティとされる人びと（障害児・者、患者、女性、少数民族など）のエンパワメントや自己決定を推進するものとして、参加型アクションリサーチ（Participatory Action Research）¹⁾や障害学（Disability Studies）²⁾という研究が注目されている。それらの研究は「質的研究（qualitative research）」という方法論を用いて、参加者（対象となる本人）の視点から当該の問題性を検討していくというスタンスを採っている。一方、行動分析学は、参加型アクションリサーチや障害学のスタンスと対立する立場、つまり単なる「量的研究」方法であると見なされることが多い³⁾。しかしながら、エンパワメントや自己決定のような問題をミクロな生活環境からマクロな制度的な問題まで連続的に分析し、さらに援助・援護の作業を考えていく上では、従来のような「『質』か、それとも『量』か」という単純な二項対立の議論や、「『質』も『量』も」といった短絡的な折衷という策では充分であるとは言えない。そこで、本稿は、行動分析学の方法論と「質的研究」との類似・相違点を認識論的立場まで遡って検討することを目的とする。さらに、行動分析学における「質的研究」手法の有用性も検討することとする。

「質的研究」とは何か

1. 質的研究の基本的特徴

質的研究は人類学、社会学（シンボリック相互作用論）、現象学などといった様々な背景を持つ。そのため、その研究方法論にも差異があると言われている⁴⁾。しかしながら、Holloway and Wheeler (1996)⁵⁾によれば、質的研究にはいくつか共通している特徴と手順があるとされている。その特徴とは、

質的研究は「イーミック（emic）な見方」、すなわちその環境のなかで生きている内部者の視点をもつ

研究者は研究中的場と文化に自分自身でひたり、かかわりをもつ

データが第一である。つまり、理論的枠組みがデータに先んじて設定されることはなく、むしろデータから理論的枠組みが引き出される

方法は「濃密な（thick）記述」である

研究者と研究される者の関係は親密（close）で、人間として対等の立場にあることを基本とする

データ収集と分析は相互に影響する

の6点とされた。また、Bryman (1988)⁶⁾によれば、質的研究の特徴とは、i) 研究対象となる人の観点から物事を見る（“Seeing through the eyes of...”）、ii) 記述（description）に徹底する、iii) 文脈主義（contextualism）、iv) 過

*本稿は2000年3月31日開催の「ヒューマンサービス/対人援助科学研究会」における発表に基づいたものである。

程 (process) の重視, v) 研究計画等に柔軟性 (flexibility) があり, 明確な構造が欠如している (lack of structure), vi) 先験的な理論や概念を使用しない, とされた。

, , i), iii) は研究者の参加者 (対象者) に対するスタンスに関連し, , , ii), iv), v), vi) は研究者のデータに対するスタンスに関連している。

2. 質的研究と量的研究の比較対照

質的研究は量的研究に対するアンチテーゼとして主張されることが多い。そこで, 以下に質的研究と量的研究に関する差異について概観する。

1) 認識論的な差異

質的研究と量的研究に対する認識論的な差異が述べられる場合, 量的研究は自然科学パラダイムとして, 質的研究は現象学 (Phenomenology) パラダイムとして分類される⁷⁾。Holloway and Wheeler (1996)⁸⁾によれば, 自然科学パラダイムとは自然界 (人間も含む) には普遍法則 (因果律) が存在するという前提に立っているとしている。つまり, 現実とは個人の「外」にあり, 独立しているという信念に基づいている。

さらに, そのパラダイムは, 客観性, 中立性 (特定の価値観に拘束されない), 観察や実験を重視する実証主義 (positivism) に基づいていると考えられている。一方, 現象学パラダイムとは, 現実とは社会的に構築され (socially constructed), 観察者と独立に存在しないという前提に立つとしている。つまり, 研究の主たる対象は人間の解釈や意味づけといった主観的現実 (人間の経験や認識) にあるとされる。さらに, そのパラダイムは人間の経験や認識を特定の文脈下から切り離さずに個別的に記述していくという立場に基づいていると考えられている。

2) 手続き論的な差異

表1は質的研究と量的研究を手続き論的な観点から対照させたものである⁹⁾。本表の1)では, 「量」のセルが “preparatory” としか表記がない。その意は, 実験や調査を実施する前に行う「準備的な」ものとして質的研究を捉えるということである。2), 3) は研究者の対象に対するスタンスに関する事項である。4) は, 「確証・検証 (confirmation)」を「演繹的 (deductive)」に, 「出現・生成 (emergent)」を「帰納的 (inductive)」に換言できると言え

表1 「質的研究」と「量的研究」との相違

	Quantitative	Qualitative
1) Role of qualitative research	preparatory	means to exploration of actors' interpretations
2) Relationship between researcher	distant and subject	close
3) Researcher's stance in relation to	outsider subject	insider
4) Relationship between theory / concept	confirmation and research	emergent
5) Research strategy	structured	unstructured
6) Scope of findings	nomothetic	ideographic
7) Image of social reality	static and external to actor	processual and social constructed by actor
8) Name of data	hard, reliable	rich, deep

る。5)の「質」のセルにある「非構造的(unstructured)」の意は研究実施に柔軟性を持たせるというものに近い。6)と7)は依拠するパラダイムの特徴に関するものである(「法則定立的(nomothetic)」対「個別記述的(ideographic)」,「実証主義」対「現象学」)。8)の「量」のセルにある“hard”は「厳密な(rigorous)」の意に近い。また,8)の「質」のセルにある“rich, deep”は,量的研究のデータを表層的(superficial)ものとして捉えたことによる。さらに,久田(1996)¹⁰⁾はBryman(1988)の表¹¹⁾に,対照次元として「調査の場」と「調査のツール」を加えている¹²⁾。そこでは,量的な研究の特徴が,人工的(実験など),表層的(アンケート調査や形式的なインタビューなど),客観的(「統計処理可能」)というもので形容され得るものとなっている。

・認識論的な分析枠

において「質的研究」の特徴を「量的研究」と対照しながら概観した。それによれば「質的研究 vs. 量的研究」という問題は認識論に及ぶものであった。そのため,行動分析学と質的研究との関係を検討する前に,その検討に必要な認識論的な分析枠を提示したい。

1. Pepper(1942)¹³⁾のルート・メタファー・メソッド(The Root Metaphor method)

Pepper(1942)は,世界それ自体についての仮説も,通常に認識される対象物(objects)の中の1つとして捉え,さらにその知識の無制限な産物のことを「世界仮説(world hypotheses)」と呼んだ。つまり,「世界仮説」とは「世界観(world views)」と同義であると考えられる。しかしながら,世界仮説を対象物として研究・分析しようとすることは既にある種の理論に基づかざるを得ないという矛盾をは

らんでしまうことになる。そこで,彼は「独断的主張(dogmatic claims)」を拒絶し「常識(common sense)」を肯定することから,論を展開していった。

彼は,その「常識」をより疑いのないものにしてしようとする際,次の2つの基準を採用した。その基準とは,「視野(scope; 包含される事象の範囲)」と「正確性(precision; 包含される事象について他の解釈が成り立たないこと)」であった。そして,より視野が広く,より正確性のある認識がより理想的となるはずである。しかし,究極的に完全な視野と完全な正確性は結局のところ,彼が定義した「世界仮説」そのものということになってしまう(つまりトートロジーとなってしまう)。そこで,彼が呈示した方法が,「ルート・メタファー・メソッド」である。「ルート・メタファー」という名称から推察可能なように,その方法は「人間は自分の身の回りに存在する,あるいは生じる事象を比喩的に利用して世界観を構成しやすい」という前提に基づいている。さらに,彼はこの方法の格率(maxims)を以下のように呈示した。

- (i) ある世界仮説はそのルート・メタファーによって規定されている。
- (ii) 各世界観は自律している
(autonomous)。
- (iii) 各世界観同士の折衷主義は混乱を引き起こす。
- (iv) ルート・メタファーとの関係を失っている概念は意味を持ち得ない(empty abstractions)。

以上の格率から引き出される主張は,ある世界仮説を用いて他の世界仮説を分析・批判することは,上述の前提条件から逸脱するばかりでなく,本質的に無益である。つまり他の世界仮説の欠点を暴くことで強められる世界仮説は存

在しない，ということである。

そして，彼は科学や哲学に共通に見られる4つの基本的な比喩を抽出した。その比喩とは，類似性（similarity），有機体（organism），機械（machine），文脈内の行為（action in a context）の4つであった。さらに各々の比喩に基づいた相対的に適応的な世界観（the relatively adequate world views）を4つ挙げた。その世界観とは，形相的世界観（Formism；以下，形相主義とする），有機体的世界観（Organicism；以下，有機体主義とする），機械的世界観（Mechanism；以下，機械主義とする），文脈的世界観（Contextualism；以下，文脈主義とする）である。

その世界観の軸となる特徴は次の基準により分類可能である。

- （i）世界は要素で構成されているか？
- （ii）世界を1つのストーリーとして語ることが可能か？

その基準により，特徴は表2のように分類される。形相主義と機械主義は部分的要素（elements）が実在し（部分的要素を基礎的事実として扱い），それによって世界は構成されていると考えるが，有機体主義と文脈主義はそ

のような要素は実在しないと考える。反対に，有機体主義と文脈主義は複雑さ（complexes），文脈（contexts），つまり全体が実在する（全体を基礎的事実として扱う）と考える。また，有機体主義と機械主義は最終的に世界がある特定の状態に（たとえば「理想世界」に）達すると考えるが，形相主義と文脈主義はそのような状態を想定しない。つまり，前者の世界観は視野（scope）に疎く，後者の世界観は正確性（precision）に疎いという欠点を有する。

2．機械主義と文脈主義

次に，機械主義と文脈主義の詳細な特徴を述べていくこととする（表3を参照）¹⁴⁾。

機械主義では「機械（ゼンマイ仕掛けの単純な機械からコンピューターのような複雑な機械まで）」がそのルート・メタファーである。その真理基準は「言語構成体とその構成体（いわゆる「理論」）によって示唆される新しい事実との一致」である。この世界観では，部分を同定し（ただし，部分は独立して存在していると考え），その部分間の関係性を同定し，さらにその部分を起動させる原動力を同定するという諸過程を通じて世界を分析・変化させようとする。また，この世界観では部分は独立して存在していると考えするために「被認識者・物」と

表2 Pepper（1942）による世界仮説（主義）の中核的特質

	（i）世界は要素で構成されているか	（ii）世界は1つのストーリーとして語ることが可能か
形相主義 （Formism）	YES	NO
有機体主義 （Organicism）	NO	YES
機械主義 （Mechanism）	YES	YES
文脈主義 （Contextualism）	NO	NO

「認識者」という二分法を採ることとなり、その二者の関係性は不変であると捉える。さらに、認識者が認識するものは世界のコピーであって、世界そのものではないと捉える。そのように考えると、直接に「真理」を検証することが不可能となってしまう。そこで、ある認識者が得た認識の「真理」を検証するために、独立した認識者たちの一致やある認識者が提出した理論を基準として間接的に「一致」で代用することとなる(よって機械主義の真理基準が上述のようになる)。また、この世界観の因果律は時間的に一方向であると考ええる。

文脈主義のルート・メタファーは「文脈中に生じている進行中の行為」あるいは「歴史的な行為」とされている。この世界観は「全体」がリアルなものと考え、世界観の統一的・統合的な結末を有していない。つまり、その世界観では、究極的な真理は存在せず、認識者と被認識者という二分法もなく、因果律も実在しないと捉えるのである。このように考えると認識すること自体を否定しなければならなくなる。しかし、ある恣意的なゴールが設定される場合にのみ認識の可能性が生じると考える。つまり、この世界観の真理基準は「その恣意的なゴールを達成したか否か(successful working)」ということとなる。もし、そのゴールを「事象の制御」

とした場合には、そのゴールを達成するという方法論的な発想から機械主義的な理論を採用する場合も考えられる¹⁵⁾。

・行動分析学の認識論的立場

ここでは で提示された分析枠を基に、行動分析学の認識論的な立場を明示する。

1. 行動分析学は「機械主義」ではなく「文脈主義」である

行動分析学の哲学的な立場は徹底的行動主義(radical behaviorism; Skinner, 1989)¹⁶⁾である。SkinnerはWatsonなどの他の行動主義者とは異なり、行動を環境との相互作用として定義し、「意識」などの内的事象も非顕現的な行動として研究可能であるとする徹底的行動主義を提唱した。つまり、単に客観性、中立性、観察や実験を重視する実証主義(positivism)、いわゆる自然科学パラダイムには依拠していない。しかしHayes and Hayes(1988)¹⁷⁾によれば、徹底的行動主義を主張しているSkinnerの言説は機械主義と文脈主義が混在しており、その認識論的な立場が誤解される可能性があるとしている。特に、Skinnerによる初期の著作にその混在が顕著であるとされている。彼らが例として挙げ

表3 Pepper(1942)による世界仮説(主義)の特徴

ルート・メタファー		真理基準
形相主義 (Formism)	類似性	言語構成体と事実との単なる一致
有機体主義 (Organicism)	生命を有し、成長する有機体	ある結論を導くような諸事実の首尾一貫性
機械主義 (Mechanism)	機械	言語構成体とその構成体によって示唆される新事実との一致
文脈主義 (Contextualism)	文脈中に生じている進行中の行為	恣意的なゴールの達成

たものは、行動の定義、因果律の捉え方、科学の目的の3つであった¹⁸⁾。そこで、行動分析学、つまり徹底的行動主義が潜在的に依拠する認識論的立場を文脈主義であるとして、以下にその特徴を明確にしていこう。

2. 行動分析学は「記述的 (descriptive) 文脈主義」ではなく「機能的 (functional) 文脈主義」である

文脈主義には、記述的文脈主義と機能的文脈主義に大別される¹⁹⁾。記述的文脈主義は、対象や参加者を検討することによって、彼らに対する全体的な評価を探究することを目的としている。つまり、その目的は「その記述的评价にある種の首尾一貫性を求める」というゴールである。そのため、記述的文脈主義者は歴史家 (historian) に例えられる。しかし、首尾一貫性を求める有機体主義と異なる点は、(1) 究極的な分析があるということを全く前提としない、(2) ある分野の進展が他の分野における進展を示唆しない、(3) 一貫性の探究は非常に個人的 (personal) なものである (つまり、客観的なものではなく、かつ象徴的なものでもない)、という3点が挙げられる。一方、機能的文脈主義はその分析に対してより実践的な目的を持つ。そのゴールは「予測と影響 (influence)」である。また、機能的文脈主義者は技術者 (engineer) に例えられる。その理由は、(1) 実

践に必要な最小限の知識を持ち、(2) 予測と結果との間に誤差が生じることを常に認める、という2点が挙げられる。以上の特徴から、行動分析学は機能的文脈主義であると言える²⁰⁾。

また、機能的文脈主義の認識論的な前提を整理すると表4²¹⁾となる。の事項は、行動が文脈から分離して扱うことが不可能であり、さらに他の次元における事象 (例えば、脳) による説明を必要としないことを意味する。

の事項は、先験的な「真理」の存在を想定しないことと文脈主義の真理基準から導き出されるものである。の事項については、上述したように機能的文脈主義の主要な特徴であるが、あくまでも主要な目的は「影響」を与える変数の同定 (正確には言語構成物の生成) であり、予測と影響が可能となるのは結果である²²⁾。また、「影響」と関連のない、単なる「予測」や「理解」はゴールとはなり得ない。の事項については、の達成を可能にするものであると言える。

・「質的研究 vs. 量的研究」から見た行動分析学の方法論

本節では「質的研究 vs. 量的研究」という比較対照で見た場合、行動分析学の方法論はどのように評価・分類できるかを検討する。

表4 機能的文脈主義に関するいくつかの認識論的前提

分析の心理学的レベル	有機体と文脈との (in and with) 相互作用の全体
分析行為	あるゴールを達成するための分析家の行為
分析のゴール	「当該のゴールを達成すること」を援助する言語的構成物を産出すること
分析枠の構成要素	恣意的 (分析家の求める分析のゴールを達成するために有用であるものが選択される)
機能的文脈主義のゴール	有機体と文脈との相互作用に対する予測と影響
分析の方法論	観察可能かつ操作可能なレベルでの実証的な分析
因果律	ある文脈的な側面が仮定された時のゴール達成に対して有用であるような記述

1. 認識論的な差異

と の検討から、「量的研究」は機械主義、「質的研究」は文脈主義として、その認識論的立場を分類することができる。よって、行動分析学の方法論は認識論的に「量的研究」より「質的研究」に近い立場にある。しかしながら、「質的研究」は、その真理基準である successful working の「ゴール」が「その記述的評価にある種の首尾一貫性を求める」ものであると考えられ、認識論的立場としては「記述的」文脈主義と分類できる。よって、行動分析学の方法論は認識論的に「質的研究」とは類似しているが、同一ではないと言えよう。

2. 手続き論的な差異

表1の8つの次元で行動分析学の方法論を検討していく。まず、行動分析学の方法論において「質的研究」の特徴に分類されるものは、2)、4)、7)であると言える。2)の特徴は特に Positive Behavioral Supports²³⁾ や行動的コミュニティ心理学²⁴⁾ という応用行動分析の近年の動向に顕著である。4)の特徴は演繹的でなく帰納的であるという点において「質的」に分類されうる。ただし、行動分析学は「理論」を構築することには懐疑的である(この点についてはグラウンデッド・セオリー・アプローチ²⁵⁾ よりエスノメソドロジー²⁶⁾ の立場に近い)。7)の特徴は文脈主義の「社会的現実」に対する認識論的な表現である。一方、行動分析学の方法論において「量的研究」の特徴として分類されるものは、3)であると言える。つまり、研究者は対象者にとって“close outsider”として存在する。一見すると修辭矛盾のような“close outsider”というスタンスは、技術者のスタンス(すなわち機能的文脈主義者のスタンス)を的確に表現している。上述したように技術者は、実践に必要な最小限の知識を持ち、予測と結果との間に誤差が生じることを常に認め、当該の

実践的な目的を達成しようとする。つまり、そのスタンスは「対象と密接にかかわる。しかし必要以上に対象については知らない(知る必要はない)」のである。また、そのスタンスは対人援助を提供する者のスタンスと一致すると言えよう²⁷⁾。

その他、行動分析学の方法論において「質的研究」あるいは「量的研究」の特徴として分類できないものは、1)、5)、6)、8)である(ただし、1)については次章で検討する)。まず5)の特徴は研究計画の柔軟性についての事項であった。行動分析学、特に応用行動分析学においては、一事例の実験デザイン(small-N or single case experimental designs; Barlow & Hersen, 1984)²⁸⁾ が用いられる。そのデザインは、いわゆる大規模調査やグループ比較のような研究(Large-N research or experimental designs)とは異なり、対象者との時系列的なかわりの変化に柔軟にデザインを組んでいける。また、一事例の実験デザインは「質的研究」、特にエスノメソドロジーのような再現可能性の低い(方法論を教授しにくい)手続きではない。つまり、その実験デザインは両研究方法の短所を乗り越えていると言えよう。6)の特徴について行動分析学は、表4の「分析のゴール」にあるように、普遍的な法則定立的(機械主義の特徴)でなく、かつ個別記述的(記述的文脈主義の特徴)でもない。8)の特徴については、行動分析学は統計処理を必須としないものの、データの測定に関しては厳密性かつ信頼性を保持しようと努めている。しかし、「質的研究」側が揶揄するように「数値化」が一概に「表層的」であると言えない。上述したように、一事例の実験デザインなら、質的研究が示すような事象を検討できると考えられる²⁹⁾。

・行動分析学における「質的研究」手法の有用性

前章の検討によって、行動分析学は「量的研究」より「質的研究」の特徴を多く持つものの、「質的研究」の目的や手続きで明らかに異なる特徴を持っていることが明確になった。そこで本章は、行動分析学における「質的研究（的手法）の役割（表1の1）」について検討する。

Schwartz, Staub, Gallucci, and Peck(1995)³⁰⁾は、質的研究の手法（つまり、対象者との会話に関する整理・分析、あるいは研究者による事象の言語記述）を、研究知見の消費者の価値やニーズに関してより敏感になるための方略として利用することができるとした。彼らは学校場面における障害児のインクルージョンを促進するための研究を実施する際に、質的研究の手法を使用している。その使用方法とは、1)インクルージョンを促進させる援助手続きの効果を評価する測度を開発する、2)1)で開発された測度に関する社会的妥当性を評価する、3)当該場面における重要人物（通常学級の先生など）による解釈を記述する、の3つであった。また、Fox, Vaughn, Dunlap, and Bucy(1997)³¹⁾は、研究の実施者として母親が参加（第4著者であるBucy氏）し、母親による日記、家族へのインタビューから得られた言語データが整理・分析された。その研究における質的研究手法の使用はSchwartzら（1996）における3)に分類されるものであった。

以上のような「質的研究」手法の使用は、a)新しい研究テーマに取り組む段階での問題性の同定、b)ある程度洗練された援助手続きの日常的な適用に関する評価を目的としていると言える。つまり、行動分析学における「質的研究」の手法は、より効果的で社会的に妥当な（socially valid）援助手続きを開発する上で、「preparatory」と“ex post facto（事後の）”にお

ける役割を担うものと言える。しかし、その役割自体は決して補足的なものではなく、機能的文脈主義者としての認識論的立場を機械主義に後退させないために重要なものと考えられる。ただし、「質的研究」手法を使用してさえいれればa)とb)の目的を常に達成できるというわけでない³²⁾。今後も、a)とb)の目的を達成するために、より洗練化した手法の探求や開発が必要であると言えよう³³⁾。

・おわりに～「一回性」をめぐる

文脈主義という認識論的立場に立てば、全ての出来事は一回限りのものである。一般的に生じるとされる「同一の」出来事とは「類似の」出来事であるに過ぎない。対人援助という実践的な文脈下では、そのような「類似性」のレベルでの「再現可能性」が探求される。もちろん行動分析学もそのような「再現可能性」を根幹として成立している。しかし、対人援助がよりマクロで統制困難な条件下では、従来の行動分析学が扱ってきたような「再現可能性」を容易に示すことは難しい。このような困難性に対して、行動分析学は研究手法が現時点で未発達であると捉えている。つまり、あくまで「再現可能性」を示すべく、個人、グループ、組織、システムという多層な随伴性に分けて記述し、当該の対人援助・援護がどの階層の随伴性に直接関与し、直接的・間接的な影響がどのように他の階層の随伴性に波及するかといった検討を指向している³⁴⁾。今後、そのような方向性の検討から、具体的な研究方法の修正・拡大が明らかとなるのではないだろうか。

註)

- 1) Sample, P. L. Beginnings: Participatory action research and adults with developmental

- disabilities. *Disabilities & Society*, Vol. 11, No. 3, 1996, Pp. 317-332. Meyer, L. M., Park, H., Grenot-Scheyer, M., Schwartz, I., & Harry, B. Participatory research: New approaches to the research to practice dilemma. *Journal of The Association for Persons with Severe Handicaps*, Vol. 23, No. 3, 1998, Pp. 165-177.
- 2) 石川准・長瀬修編 『障害学への招待：社会・文化・ディスアビリティ』（明石書店，1999年）
 - 3) 例えば，以下の論文が挙げられる。
Wolfensberger, W. Self-injurious behavior, behavioristic responses, and social role valorization: A reply to Mulick and Kedesdy. *Mental Retardation*, Vol. 27, 1989, Pp. 181-184.
 - 4) Baker, C., Wuest, J., & Stern, P. N. Method slurrings: The phenomenology / grounded theory example. *Journal of Advanced Nursing*, Vol. 7, 1992, Pp. 1355-1360. Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. Introduction: Entering the field of qualitative research, in N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research*, 1994, Pp. 1-17. Stern, P. N. Eroding grounded theory, in J. M. Morse (Ed.), *Critical Issues in Qualitative Research Methods*, 1994, Pp. 212-223.
 - 5) Holloway, I. & Wheeler, S. *Qualitative Research for Nurses*, 1996, Pp. 3.
 - 6) Bryman, A. *Quantity and Quality in Social Research*, 1988, Pp. 61-69.
 - 7) Ponterotto, J. G. & Grieger, I. Merging qualitative and quantitative perspectives in a research identity, in M. Kopala & L. A. Suzuki (Eds.), *Using Qualitative Methods in Psychology*, Pp. 49-62.
 - 8) Holloway, I. & Wheeler, S. *Qualitative Research for Nurses*, 1996, Pp. 9-14.
 - 9) Bryman, A. *Quantity and Quality in Social Research*, 1988, Pp. 94. 同表は以下の文献に加除筆されて掲載されている；久田則夫『施設職員実践マニュアル：インフォームド・コンセントにもとづいた利用者主体の援助プログラムの勧め』（学苑社，1996），Pp. 87.
 - 10) 久田 前掲，Pp. 87.
 - 11) Bryman, A. 前掲，Pp. 94.
 - 12) 久田（1996）では表1の6）の次元が削除されている。
 - 13) Pepper, S. C. *World Hypotheses*, 1942.
 - 14) 形相主義と有機体主義の特徴については本稿の主題との関係が薄いため割愛した。
 - 15) そのような場合には，あくまでもそのゴール達成のための方便として機械主義的な方法論を採るということに過ぎない。
 - 16) Skinner, B. F. *Recent Issues in the Analysis of Behavior*, 1989, Pp. 61-64.
 - 17) Hayes, S. C. & Hayes, L. J. Some clinical implication of contextualistic behaviorism: The example of cognition, *Behavior Therapy*, Vol. 23, 1992, Pp. 225-249.
 - 18) 例えばSkinnerが行動の定義を明確に定義しているの以下の文献である。*The Behavior of Organisms*, 1938, Pp. 6. 該当する文章は，“A Definition of Behavior”の節にある，“It is more to the point to say that behavior the functioning of an organism which is engaged in acting upon or having commerce with the outside world (I10-I13)”と“By behavior, then, I mean simply the movement of an organism or of its parts in a frame of reference provided by the organism itself or by various external objects or fields of force (I18-I20)”である。前者の文章が文脈主義的な表記，後者の文章が機械主義的な表記と言える。しかし，“A Definition of Behavior”の節全体を読むと文脈主義の認識論的な立場であることが理解できる。
 - 19) Hayes, S. C. Analytic goals and the varieties of scientific contextualism, in S. C. Hayes, L. J. Hayes, H. W. Reese, & T. R. Sarbin (Eds.), *Varieties of Scientific Contextualism*, 1993, Pp. 11-33.
 - 20) 武藤崇・松岡勝彦・佐藤晋治・岡田崇宏・張銀榮・高橋奈々・馬場傑・田上恵子 「地域社会に根ざした「教育方法」から「援助・援護方法」への拡大 - 行動的コミュニティ心理学からの示唆 - 」『特殊教育学研究』37巻，3号，1999年，Pp. 81-95.
 - 21) 武藤崇『『セッティング事象』の概念分析 - 機能的文脈主義の観点から - 』『心身障害学研究』23巻，1999年，Pp. 133-145.
 - 22) 佐藤方哉「行動心理学は徹底的行動主義に徹底している」『理想』625巻，1985年，Pp. 124-135.
 - 23) Koegel, L. K., Koegel, R. L., & Dunlap, G. *Positive*

- Behavioral Support: Including People with Difficult Behavior in the Community*, 1996.
- 24) 武藤・松岡・佐藤・岡田・張・高橋・馬場・田上 前掲論文, Pp. 81-95.
- 25) 木下康仁 『グラウンディド・セオリー・アプローチ: 質的実証研究の再生』(弘文堂, 1999 年)
- 26) 山田富秋 『日常性批判: シュッツ・ガーフィンケル・フーコー』(せりか書房, 2000 年)
- 27) 望月 昭 「デニーズへようこそ, お客様の平均年収は? : 応用行動分析から」『発達の遅れと教育』380 巻, 1989 年, Pp. 16-19.
- 28) Barlow, D. H. & Hersen, M. *Single Case Experimental Designs: Strategies for Studying Behavior Change*(2nd. ed.), 1984.
- 29) 例えば, 以下の論文を挙げることができる。山崎敬一・好井裕明・保坂幸正 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力: <車イス使用者>のエスノメソドロジー的研究」『社会学評論』44 巻, 1 号, 1993 年, Pp. 30-44.
- 30) Schwartz, I. S., Staub, D., Gallucci, C., & Peck, C. A. Blending qualitative and behavior analytic research methods to evaluate outcomes in inclusive schools, *Journal of Behavioral Education*, Vol. 5, No. 1, 1995, Pp. 93-106.
- 31) Fox, L., Vaughn, B. J., Dunlap, G., & Bucy, M. Parent-professional partnership in behavioral support: A qualitative analysis of one family's experience, *Journal of The Association for Persons with Severe Handicaps*, Vol. 22, No. 4, 1997, Pp. 198-207
- 32) 兼子一 「ラディカル・リフレキシビティ再考 - reflexivity を radical かつ, referential にするとはどういうことか - 」『Sociology Today』6 巻, 1997 年, Pp. 55-74. 兼子一 「リフレキシビティとエスノメソドロジーを实践すること」(山田富秋・好井裕明編 『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房, 1998 年), Pp. 88-104.
- 33) Schwartz, I. & Baer, D. M. Social validity assessments: Is current practice state of the art?, *Journal of Applied Behavior Analysis*, Vol. 24, No. 2, 1991, 189-204.
- 34) Biglan, A. *Changing Cultural Practices: A Contextualist Framework for Intervention Research*, 1995.